

日本文学全集

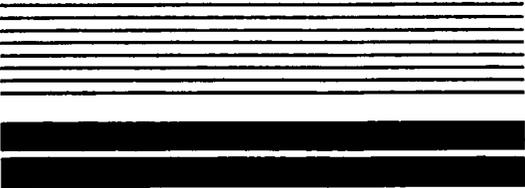
17

山本有三



女の一生・真実一路

河出書房



山本有三



カラー版日本文学全集 17

1969©

昭和四十三年八月三十日 初版発行
昭和四十四年七月十五日 再版発行

定価 七五〇円

著者 山本有三

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたしません

目次

山本有三

女の一生……………五

真実一路……………二四九

注 釈	紅野敏郎	四〇一
年 譜	高橋健二	四二二
解 説	高橋健二	四三三
巻頭写真	畔田藤治	
色刷挿画	福田豊四郎	
真実一路	石井鶴三	

山
本
有
三

女の
一
生

第一部

糸きり歯

—

允子(まさこ)は青い草の上ですわって、ころもちはれあがった左のほおをおさえながら、あお向いて、大きな口をあけていた。が、上を向いていると、空の緑が目にしみるので、彼女のまぶたは、ひとりでにふさがっていた。野の風が、おさげのリボンを軽くゆすぶった。うしろの大きな松のこずえで、うるさく鳴きしきっている油セミの聲が、うずく歯にちりちり響いた。

允子の開いた口の上に、昌二郎(しょうじろう)のほそ長い、白い顔がかぶさっていた。彼は人の口の中を、こんなにはつきり見たことがなかった。口の中って随分きれいなものだなあ、と思いながら、彼は桜もちのあんを抜いてしまったあとの、あの柔らかい桃色のしん粉の皮を、すぐに連想した。あんを抜いた、桃色のふわふわしたしん粉の内がわに、まっ白いあるへい糖を上下にずらりと並べたのが、なんのことはない、允子の口の中だった。彼は、即座にたべてしまいたい衝動を感じた。

「何してんの。早くやっつてよ。」

允子は口をあいたまま言った。

昌二郎は空想を破られたので、急にどぎまぎしながら、持っていたクギヌキを、なんということなしに、二、三度ガチガチ鳴らした。

「これよ。——これだって、さっきから言ってるじゃないの。」

允子は人さし指のさきを、痛む歯の上に持っていった。

「そら、こんなに動いてるじゃないの。」

「あ、そいつか。随分、動くね。」

「動くだろう。こんなにぐらぐらしてるんだから、すぐ抜けるよ。」

——自分じゃ、どうしてもぐいとやれないから、昌ちゃん、やっつて、早く。」

「よし。——これだね。」

昌二郎は指で、下あごのおく歯の一つを押した。

「ううん。」

允子は「わかんない人ね。」という顔をしながら、昌二郎の指を払いのけ、口を曲げながら、ことさら、糸きり歯を彼のほうに突き出して、指さきでこれだと示した。

昌二郎は彼女のおさえている指の上に、自分の指をのせた。そして、彼女が指を引っこめたと同時に、クギヌキを、その歯にあてがった。

「痛くない。」

允子は黙って首を動かした。

「いいか。引っばるよ。」

彼は力を入れて引っばった。しかし、はさみ方が悪かったせいか、引っばるや否や、ガチャリとはずれてしまった。

「痛くない。」

「痛くないってば。」

允子は、口の中にとまったつばを吐き出しながら言った。

「でも、痛そうな顔してるんだもの。」

「そりゃ痛いよ。歯を抜くんだもの。だけど、それっくらい我慢する

から、思い切つてうんとやつて……」

昌二郎はうなずいて、クギヌキをはさみ直した。そして、もう一度ひっぱつたが、今度もすぐはずれてしまつて、うまくいかなかった。

「尤ちゃん、抜けないよ。まだ早いんだ。」

「早かないよ、ちつとも……」

「こんなことしなくつたつて、ほつとけば、ひとりでに抜けるつたら……」

「いや、あたし。歯のぐらぐらしてるのなんか。——だめね、昌ちゃん。」

「だつて、うまくはさまないんだもの。」

「はさまつても、ぐつと引っぱれないんだらう。——こわいの、昌ちゃん。」

「そんなことあないけれど、おらあ、いやだ。——いろんなこと言うんなら、自分で抜いたらいいじゃないか。」

「自分でできれば、頼みやしないじゃないか。昌ちゃんは弱むしね。歯も抜けないなんて。」

「おらあ、歯医者じゃないよ。」

昌二郎はクギヌキのあいだに、自分の親ゆびをわざとはさんで、ぐいと締めつけながら、しかめ顔をして、つっけんどんに答えた。

「だれも、あんたを歯医者だなんて、言つてやしないじゃないの。男のくせに、力がないつて言つたんじゃないの。」

「そ、そんなこと言うんなら……」

「そんなこと言うんなら、何？」

「そんなこと言うんなら、本当に、ぐんと引っぱつてやるぞ。」

「え、引っぱつてちょうだい。思い切り、ぐうんと。」

「泣いたつて知らないよ。」

「あ、いいとも。」

「本当だよ。本当に力いっぱい引っぱるんだよ。」

「ああ、いいつてば。どんなに引っぱつたつて。」

二

そこで、允子はまた大きな口をあいて天上を向き、昌二郎は大きなクギヌキを構えて、彼女のわきに立った。彼は指の先で、ぐらぐらする歯を確かめてから、おもむろにクギヌキを差しこんだ。さつきは、はさみ方が浅かつたためにはずれてしまつたから、今度はできるだけ深くおさえて、クギヌキに、十分力がいいるようにくふうした。

「いいかい。引っぱるよ。」

「ああ……」

允子の返事は、口をあいているので、はっきり聞きとれなかった。

昌二郎は、軽くおさえていたクギヌキのもとを、ぎゅつと締め、力いっぱい引っぱるうとした。すると、その途端に、

「あ、いた、た！」

と、突然允子は悲鳴をあげた。

「なんだ。もう泣くのか。」

男の子は勝ちほこつたように、允子を見おろした。允子のほおは、白い水たまたが二、三滴、ぼろぼろころがっていた。

「そうれ見ろ。だから泣くつて言うんだ。」

「だ、だつて……」

允子は泣きながら言つた。

「肉をはさむんだもの。……肉をはさまれば、だれだつて痛いじゃないの。」

彼女は昌二郎をにらみつけるような顔をしながら、人さし指の先を口の中に持つていった。

「そら、こんなに血が出たじゃないか。意地わる！」

允子は指の先の赤いものを、彼の前につきつけた。

「わざとやったんだらう。あたしを泣かそうと思つて……」

「わざとなんかやりやしないよ。はずれないように深くはさんだんで、じゃ、肉にさわつたんだ。」

「そんならもう一度。今度は肉をはさんじゃいやだよ。」
「大丈夫だよ。」

昌二郎はクギヌキをはさみ直して、もう一度やった。クギヌキがうまく歯にかかったと見えて、歯の根のあたりで、モリッという音がした。彼はその音でひやつとしたので、引っぱるのを急にやめてしまった。

「痛くない？」

「ううん。」

允子は涙をぼろぼろこぼしているくせに、「ううん。」と言った。

「また少し血が出たね。」

「大丈夫だよ。」

「本当に痛くない？」

「痛くないってば。——もうちょっとだから、ぎゅっと引っぱって。」

「大丈夫かい。」

「大丈夫だってば。」

昌二郎はふたたびクギヌキを糸きり歯にかけて、もりもりやった。もりもりやっているうちに、何か、ゴキーンと音がしたような気がしたが、その瞬間に、允子は急に、

「ああん！」

と、とてつもない声をはり挙げたと思ったら、いきなり昌二郎のからだにびったりしがみついてしまった。しがみつくと同時に、下あごのあたりを、ぐいぐい彼の胸にこすりつけてきた。昌二郎はびっくりして彼女を見た。彼女の口の端から、つばといっしょに血が流れていた。彼ははいよいよびっくりして、クギヌキを投げ出したまま、允子をいたわった。

「どうしたの。——痛かった。また肉をはさんじゃったの。」

「……………」

「え、どうした。——ごめんね。允ちゃん、ごめんね。」

允子はなんにも答えないうで、泣きながら、一層つよく彼の背なかの

肉をつかんだ。

と、何かわからない力が、昌二郎の体内にわきあがった。彼の両うででは、突然彼女の肩をぎゅっと締めつけた。そうしたら、允子は前よりももっと声をはり挙げて、ほおをすり寄せてきた。すり寄せられると、昌二郎はいよいよ堅く彼女を抱き締めた。

うしろの松のこずえでは、あい変わらず油ゼミが鳴きしきっていた。

緑の草の上には、小さい白い、とんがったものが、水晶のように光っていた。

三

それから二、三日のちのことだった。允子は口の中に指を入れて、昌二郎のうちのほうへ遊びに行った。歯を抜いたあと、そのところから、口の中に風がすうすうはいるので、彼女の指はいつのまにか、そのすきまにはさまってしまうのだった。

彼の家のそばの、かきねの近くまで来ると、

「允ちゃん。」

と、昌二郎の声がどこからともなく飛んできた。彼女はあたりを見まわした。しかし昌二郎はどこにもいなかった。

「允ちゃん。」

また声が出た。しかしいくら捜しても、どうしても見つからなかった。

「どこ、昌ちゃん。——どこに隠れているの。」

「ここだよ。ここだよ。」

枝をカサカサ動かす音が出たので、允子にもやっとわかった。かさなったビワの葉のうしろに、昌二郎のイガグリ頭が、リスのようにちよっぴり見えた。

「なんだ。そんな所にいたのか。」

「允ちゃん。手を出しなよ。」

「シャツ一枚で登っている昌二郎が、木の上から叫んだ。

「なんだい。」

「ビワをやるよ。」

「ビワ?」

「うん。」

「もうたべられる。」

「たべられるとも。うまいぜ。手を出しといでよ。今もぎってやるから。」

昌二郎はうまそうなのをひと枝もぎって、ぼうんと下に投げた。しかし允子は取ろうとしなかった。

黄いろい果実は、乾いた土の上でぐちゃぐちゃに割れて、なか身を見せたままころがっていた。

「どうして取らないの。」

「あたし、こじぎじゃないよ。投げたものなんかいやだ。」

「そんなこと言ったって、うまいんだぜ。とても水があるんだよ。」

「いらないうたら。」

「ふん! いばってやがら。口の中に指つつこんでるくせに。」

允子ははっとして指を出した。

「だって、抜いたあとが、歯を抜いたあとが、へんなんだもの……」

「やあい、歯っかけばあさん! 歯っかけばあさん!」

急に木の上の子どもが、はやしだした。

と、允子は昌二郎の登っている木に、やにわに飛びついた。

「おい、いけない。そんなとこで木を動かしちゃ……」

「動かすんじゃない。あたしも登るんだよ。」

「登る? 允ちゃんなんかに登れやしないよ。」

「昌ちゃんに登れるんなら、あたしにだって登れるよ。」

彼女はするすると登り始めた。

「おてんばだね。允ちゃんは。女のくせに。」

「おてんばだっていいよ。」

彼女は少し登りかけたが、その上の枝に手が届かないので、それから先がなかなかうまく進まなかった。

昌二郎はそれを見ると、上からおりてきて、允子にやさしく手を伸ばした。

「允ちゃん、これにつかまんなよ。引っぱってやるから……」

「いいよ。そんなことしてくれなくなっちゃったって。」

「強情だな。いいからつかまれば……」

允子の目の中で何かが動いた。彼女は何も言わずに、彼の手にぎゅっとつかまった。からだが一ひたりに上に伸びた。彼女の左の手は、やがてすぐ上の枝をつかんだ。

四

大きなビワの木、中ほどの左の枝に、昌二郎がまたがり、右の枝に允子が腰を掛けていた。ふたりは、一本の木の両がわに並んで、熟した実をえり取っては、うまそうにたべていた。その横のスギの木から、ビワのほうに、にゅっと突き出した枝の先には、これも仲よくカタツブリが二匹、つのも動かさずに、ちょこなんとのかかっていた。家の者は野らに行ったりと見えて、あたりには人の声もなかった。ただ、ふたりがたべては落とすビワの種が、土の上ではね返る音だけが、ま昼の静けさを破っていた。

日は照り、野は輝き、風は軽かった。

道ばたの横の小川の端で、ガチョウが三、四わ、ガアガア何か立ち話をしていた。

水の上を縫って、ヨソキリ*が一わ、すうっと飛んだ。

ビワの実のうれた甘いにおいの中にあって、ふたりは、これが幸福というものだ、ということも知らないほど、無心に、黄ばんだ木の実に口を運んでいた。

どこかのおっさんが、はだか馬を引っぱって木の下を通った。允子はその馬のしりに、ビワの種をぶっつけた。しかし、馬はうしろ足を

ちよつとあげただけで、「ヒイン」とも言わなかった。

「待って。おれ、あの耳にぶつつけてやるから。」

「耳に？ 耳になんか当たりやしないよ。」

「当たるさ。きつと当ててみせろ。」

昌二郎はそう言つて、ビワの種を握つたまま、じつとねらいをつけていた。やがて彼はほうつたけれども、ビワの種は馬の耳には当たらないで、馬を引っぱつておっさんのステガガサに、パチャンと当たつた。

「だれた。」

おっさんは、うしろをふり返つてにらみつけた。

允子はその声に驚いて、急に太い幹のうしろに隠れてしまった。

「悪ざするときかねえぞ。」

おっさんはまたどなった。

繁つた葉のうしろに、小さくなつていた昌二郎は、その声にいよいよこわくなつたのか、幹につかまつたまま、ぐるるとそのうしろがわにすべつて、允子の背なかのほうに寄つてきた。そうしてできるだけ身を隠そうとして頭を縮めながら、彼女のうしろにびったりひつついてしまつた。

「痛い！ そんなに押しちゃ……」

「しっ！ 黙つて」

昌二郎はどの奥のほうでたしなめた。

そのあと、おっさんの声は聞こえなかつた。昌二郎は允子の肩のうしろから、こわごわ首をあげて見た。もう、おっさんも馬も見えなかつた。

「痛いたら、何するの。」

「なんにもしてやしないじゃないか。行つちやつたかどうか、見ただけじゃないか。」

「だって、クギのようなもんで突つつくんだもの。」

允子も道のほうを見たあとで、ぶんぶんしながら言つた。

「クギ？ おら、そんなもの持つてやしないよ。」

「でも今、細い、とんがったもんで、背なか突つたじゃないか。」

昌二郎は、思わず胸の隠しに手をやった。なるほど、小さい、とんがったものがその中ではいつていた。彼は一生懸命に隠れようと思つて、允子のうしろにまわり、彼女の背なかにひつついていたから、からだですれた拍子に、自然、そいつが允子の背なかを刺したものにちがいない。

「なんだ。こいつか。」

「何よ。何もつてるの。」

允子は元の枝に戻つて、昌二郎の顔を見あげた。

「なんだつていいじゃないか。」

男の子は、少しきまりが悪そうに、横のほうを向いてしまつた。

五

「いけないいたら。」

向こうのことばにおつかぶせて、允子は言つた。

「本当に、何もつてるのよ。——なんで突つたのよ。」

「なんだつていいじゃないか。」

昌二郎は同じことばをくり返すよりほかなかつた。

「そんなつて、……人を突つておきなながら、ずるいや。——見せてよ、なんだか。よう、昌ちゃん。」

しかし昌二郎は、ことさら隠しの上に手をあてて、わざと中のものを見せまいとした。すると允子はやっきになつて、ぐいぐい昌二郎のシャツを引っぱり、むりやりに隠しの中に指を突っこんでしまつた。

昌二郎は、見せまいと思えば、いくらでも見せないですんだのだが、木の上なのであんまり争うとあぶないものだから、しまいには、允子のするままに任せていた。

允子は隠しの中のものを取り出して見て、あまりに予期しないものだったのに驚いた。

「なんだ。こんなもんか。」

「……………」

「これ、こないだのじゃない。」

「……………」

「バカね、昌ちゃんは。こんなもの持つてるなんて。」

「バカだっていいよ。」

「それに、きたないじゃないの、こんなもの。」

「そう言いながら、彼女は小さいとがったものを、ぼうんと地面にほうり投げた。

「なんだって捨てちまうんだい。」

「きたないからさ。」

「きたないって、あれはおれのもんじゃないか。」

「おれのもん？ あんなこと言ったら。あれはあたしの歯じゃないか。」

「元は允ちゃんのだって、おれが抜けばおれのもんじゃないか。」

「へえ、昌ちゃんが取ったんだから、昌ちゃんのもん、そうお？」

「允子は口をとんがらせて、そう言ったかと思うと、急にっつると幹をすべり始めた。

「あぶない。そんなふうにおりちゃ……………」

昌二郎が言った時は、允子は一ばん下の枝の所から、ぼうんと地上に飛びおりた瞬間だった。彼女は飛びおると、ちよっところがったが、すぐ起きあがって、かけだして行った。小さい、とんがった歯は、乾いた土の上でさらさら笑っていた。

彼女はそれを取りあげると、ビワの木のほうに戻ってきた。その時、昌二郎も幹をおりかけて、ちよっと一ばん下の枝まできたところだった。

「はい。」

微笑しながら、允子は拾った歯を昌二郎のほうに突き出した。昌二郎は半ぶん手を出したが、すぐ引っこめた。

「さあ、昌ちゃん、返すよ。」

昌二郎は允子のほうを見ないで、そっと受け取った。允子も昌二郎の顔を見なかった。見なかったけれども、何か知らないものが、からだの中をすうっと通り抜けて、指の先がぶるっとふるえた。

「おかしな人。こんなものがないなんて。」

彼女は下を向いたまま、小さいしを一つ拾った。そうして、両手で軽く包んで、なんというわけもなしに、ころころと振った。そうしたら、昌二郎も木の上で、糸きり歯を手のひらの中に入れて、同じようにころころと振った。

允子はひとりで、ぶっと吹き出した。

昌二郎も、ぶっと吹き出した。

横の小川で、ザコが一匹びよんとはねた。

婚約のゆび輪

一

「どうしてあなたは、そうわからないんでしょうね。いつまでもわからないことを言っているなら、おかあ様はもうかまいませんよ。」

母おやにそうきめつけられても、允子はやっぱり泣きやめなかった。彼女は母のひざに抱きついたまま、しゃくりあげていた。

「あなたがなんと言っても、あれだけはだめなの。あれは、おねえさんしか持てないものなんですから、あなたがいくら泣いてもあげられません。」

「……………」

「まあ、あなたという人は、どうしてそう強情なんでしょう。さ、もう泣きやめなさい。きっぱりと泣きやめなさい。——あんな大きなゆび輪、あなたが持ったって、どうにもなりやしなないじゃありませんか。指はめがほしいのなら、さっきも言ったでしょう、いくらでも、

ほかの指はめを買ってあげますから……」

允子は、母の言うことが一つ一つよくわかっていった。それでいながら、どうしても、「はい」という返事が、すなおに口に出なかった。

彼女は言いだすときかない性分だった。兄や姉からは九年も十年も遅れて、ぼつり生まれた末っ子であったせいとか、わがままいっばいに育てられたために、何かほしと言いつつと、どうしても、それを手に入れたいと承知しない癖があった。もっとも、きょうのは、ただ姉のゆび輪がほしいというだけの、単純なものではなかった。押しつけていたら、結局そこに着かぬのかもしれないが、彼女としては、指はめそのものよりも、指はめをくれない姉が憎らしかったのである。病みほうじた姉が、どうせ死んでゆく姉が、人にものをくれると言っておきながら、指はめを無性に惜しがるのが、允子には、けちん坊のように思えて、仕方がなかったのである。彼女は、強情を張って泣いていると言うよりは、何かむしゃくしゃするものが、彼女ののどを突っついて、声を出させているのだった。

姉はもう半としも前から病氣だった。初めは、ちよつとかぜをひいたぐらいの、ごく軽いものだったが、それがこじれて、とうとう肺せんから結核^{*}になってしまい、起きあがることもできないような状態になってしまった。東京から有名な博士にも来てもらい、入院せよと言えば入院、転地せよと言えば転地、ありとあらゆる手を尽くしたのだけれども、さっぱり験(けん)が見えなかった。最後には、姉も死期の近いことを知ったのか、近親の者に会いたいと言いだした。允子が転地さきに呼ばれたのも、そのためだった。

彼女は数ヵ月ぶりで姉を見た。しかし、器量がいいので評判だった姉が、病室にはいつて見ると、まるで、別の人かと思われるほど、顔かたちが変わっているの、允子は親しみよりも、むしろ、気味の悪い感じを、まっさきに受け取った。

「允ちゃん、よく来たのね。」
声に力はなかったけれども、優しさは、いつもの姉と少しも変わり

がなかった。

「遠い所に来てくれたんだから、何かいいものをあげましょうね。允ちゃんのすきなものを、なんでも……」

姉はそれとなしに、妹にかた見をわけてやるつもりらしかった。

「允ちゃん、なにがいい、妹にかた見をわけてやるつもりらしいねえさんの持っているもので……」

允子は、そう言われると、言下に、

「これがいい。」

と言つて、姉の指に輝いていたゆび輪を差した。

「あら、これは困るわ。」

微笑と当惑とが、ごっちゃになって、姉の顔に現われた。

二

「ううん、あれがいいんだい、あれが。」

「ほほほ、それだけはいけないの。」

母も苦笑しながら、わきから口を入れた。

「それでなく、なにかほかのものをちょうだいなさい。」

「允ちゃん、ねえさんの言い方が悪かったのね、なんでもいって言ったから。ごめんなさい。けれど、これだけはいけないの。これはね……これはね……」

と言っているうちに、姉は急に泣きだしてしまった。

すると允子もまた、大ごえをあげて泣きだしてしまつたのである。

「そんなに指はめがほしいんなら、ほかのを買ってあげましょう。允ちゃんには何がいいだろうね、ナンキン玉なんかじゃなく、もっといいのにしましょうね。」

「いやだ。いやだ。」

「やっぱ、ああいう光つたのがいいの。それなら仕方がない。これをあげましょう。」

母は自分のくすり指に手をかけた。

「いらぬ。いらぬ。そんなの……」

「まあ、しようのない人ね、この人は。」

母は手あらく、允子をひざの上にひき寄せた。

「允ちゃん、そんなに言ってもこれは無理よ。——これだけは……これだけは……あたし……」

泣きながら、激しくせき入ったと思うと、姉は急に血を吐いた。

允子は母のひざに顔を押しつけていたから、幸いそれを見ないですんだ。しかし、そういう所に子どもを置いてはと思って、母は急いで、彼女を別の座しきにつれて行ってしまった。しかし、別の座しきへつれて行かれても、彼女はやっぱり泣きやめなかった。

どうして允子がこんなに姉のゆび輪をほしがるのか、それにはいろんな理由があると思う。一つには、その金のゆび輪には、ルビイとダイヤモンドがちりばめてあるので、姉が指を動かすたびに、くれないと白の高雅な光が、ほのかにきらめくものだから、それが彼女には、たまらなくうらやましかったものにちがいない。けれども、ルビイとダイヤモンドがほしかったために、だだをこねたのだと言ってしまったのでは、彼女の心もちを尽くしているとは思われない。もとより彼女には、それが婚約のしるしであったのかどうか、まるっきりわからなかったのだが、姉が病気になる少し前、ある日りっぱな洋服を着た、きれいな男の人が来て、姉の指に、あのゆび輪をはめて行った。それを彼女はわざから見ていて、「ねえちゃんはいいなあ。允ちゃんのところにも、ああいう人が来て、ゆび輪をはめて行ってくれるといいなあ。」としみみ思ったことがある。そして姉を見るたびに、その指に輝いているものが、彼女にはうらやましくてたまらなかったのである。しかし姉が病気になる、転地をするようになってからは、自然、その光も彼女の前から消えたので、允子はいつのまにか、すっかり忘れてしまっていた。ところが、きょう久びさで姉に会うと、厚い夜具の下で、ルビイとダイヤモンドが、またきらりと光ったので、允子の意識の底には、ふたたび前の気もちが、ほのかに芽を出しかけていたらしい。しかし、

なんでもすきなものをおねだんなさい、と言われなかったら、彼女にしたらって、こんなにすねはしなかったらう。おそれなく、允子を一番ぐずらせたのは、なんでもいいものをあげる、と言っておきながら、彼女が望んだものを、くれなかったためではあるまいか。彼女にしてみれば、それが婚約のゆび輪だということも知らないし、第一、婚約のゆび輪が、どういう意味を持つものかなど、無論、知っているはずもなかった。けれども姉にとっては、これは身命よりも大事なものであった。自分は死んでも、これだけは、墓の中まで持って行くつもりでいるのだから、いくらかわいいたのことも、こればかりは譲るわけにはいかなかったのである。しかし子どもである允子には、そんなことはわからなかった。ただ一ずに、姉を「うそつき」「しみつたれ」と思い続けていた。

三

允子は母のひざに突っ伏してうちに、いつのまにか、泣き寝いりに寝いてしまった。それから、なん時間ぐらいたったかわからないが、突然、夜なかに起こされた。

「允ちゃん、おっきなさい。允ちゃん。」

允子は夢ごちのまま起きあがった。

寒い晩だった。何か知らないが、上の歯と下の歯とがかち合って、ひとりでにカチカチ鳴った。そとでは松のこずえを渡る風が、あらしのようにうなっていた。

彼女は母につれられて、病室にはいつて行った。そして、ぬれた筆と、水を入れた茶碗を渡された。

「おねえ様の口に、これをつけておあげなさい。」

允子はそれを渡されても、まだはつきり姉の死を知らなかった。彼女はなお夢の中にいた。しかし、くちびるの色の変わった姉の顔を、まともに見たら、激しい、わけのわからない感情が、急に胸にこみあげてきた。背ほねが一瞬間に凍ってしまって、すわっていることがで